少女達の発情期～怪物異世界録～

鴉～夢の運び屋～

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
少女達の発情期～怪物異世界録～

【Ｎコード】
Ｎ０１６７Ｏ

【作者名】
鴉～夢の運び屋～

【あらすじ】
夏休みを利用してリゾート地へ旅行に来ていた少年。竹取鏡夜（１７才）は、突然の出来事から異世界へと落とされてしまう。そこで出会った少女達は、鏡夜に惹かれていく。そして鏡夜は元の世界に戻れるのだろうか。

この作品は、作者の妄想がたっぷりと詰まっております。表現だけでも獣娘がきらいな方は読むことを推奨できません。まぁ、作者の妄想を覗きたいだけなのなら読み方は変わることとなるでしょう。

とにかくは注意をしましたよ？

prologue　異世界入り

人とは、見慣れない姿の物を見てしまうと反射的に驚いてしまう物である。同時に、未知への恐怖と好奇心も生まれてくるのは人間の本能に限りなく近い事なのだ。そして、此処に一人の少年がいつもと変わらないありふれた一人暮らしを絶賛満喫中だった。

「んんっ・・・はぁ～～・・やっぱりいいなぁ・・・・一人で旅行に来て正解だな。」

この少年。竹取鏡夜（たけとりきょうや）は、学校の夏休みを利用してバイトで溜めた貯金をちょこっと使って海岸線と山の良く見えるリゾート地へ旅行に来ていた。今は旅館の人に案内された部屋で伸びをしながら大自然に浸っている感じだ。

「いやぁ～。やっぱり心をリラックスさせようと此処にしたのは正解・・「・・・・」！？」

感傷に浸っていた鏡夜だが、ふと背後から誰かの声が聞こえた気がした。一瞬気味が悪くなった鏡夜だがそんな気持ちは直ぐに消し飛んだ。耳を澄ませると、隣の部屋から怒号が飛び交うのが聞こえて来た。十中八九隣の部屋の人が喧嘩でもしているのだろう。そして、先程の空耳もこれだったのだと安心した鏡夜はホッとして胸を撫で下ろした。暫く景色を眺めていた鏡夜は、時間を見計らって旅館の大食堂へ移動した。

「うはぁ！美味そうな御馳走ばっか！いいよな。一人だもんな。」

目を輝かせて皿を手に握りしめた鏡夜は、ハイテンションになっていたが途中で周りの目を気にして声を抑えた。彼の見た目は、明るい性格に似合わずクールそうな顔立ちをしている。そんな顔で不抜けた事を叫ぶようでは廻りの視線が痛い。なので、鏡夜はなるべく

クールに振舞うようにしているのだ。料理を皿に移して席まで運んだ鏡夜は、料理を物凄いスピードで完食すると部屋へ戻った。

「いやぁ、食った食った。満足だねぇ・・・」

満腹感に浸っていた鏡夜だったが、唐突に運命の湾曲は訪れた。鏡夜の座っていた位置いきなり人一人が通れる程度の大穴が開き、鏡夜はその中に落ちそうになった。

「なっ！なんだこりゃぁ！」

突然すぎる出来事に驚く鏡夜だが、反射的に掴んだ畳のおかげで何とか助かりそうだった。そのまま自慢の運動神経を駆使して這い上がろうとした。しかし、それは叶わなかった。突如下の方から何かが鏡夜の足を掴むと、鏡夜を穴の中へと一瞬で引きずり込んでしまった。その直後には穴は閉じ、そこには誰も居なくなっていた。

「うわあぁぁぁぁぁぁあ！」

穴の中を落ちていく鏡夜は、意味もなく叫んでいた。これも人間の本能というものだろう。とにかく鏡夜の頭の中には絶望が手招きをしている状態だった。このままではいけないと思った鏡夜だが、手を伸ばしても何処にも届きそうになかった。そこで早くも諦めた鏡夜は、全てを任せて目を瞑った。しかし！

「・フフン♪・・フフ・・ぁん！」

鏡夜の耳元に誰か少女の歌声が聞こえたかと思った瞬間、何か柔らかい物に衝突して衝撃が消え去った。その時に少女の声が色気を帯びた声になっていたが、鏡夜は恐る恐る顔をあげて見た。そこには一人の少女が顔を赤くして鏡夜の目の前にいる。しかしこの少女。何処かおかしい。何と言うか、自分とあまり年も変わらないようなのだが、見た目にかなりの違いが見られた。まず最初に、彼女の体が半透明に透き通っている時点で理解不能だった。普通、体が半分

透けている人間なんていない。しかもこの少女、鏡夜が落ちた場所の形はスライムのように崩れている。

「え？え？ええっ？」

何が何だか分からなかった鏡夜だが、それは少女の方も同じのようで鏡夜を見て目を輝かせていた。好奇心旺盛な子と思った鏡夜だったが、次の少女の発言によってその考えは一瞬で砕け散った。

「ねぇ！人間さん？私とえっちな事・・・しよう？」

いきなりすぎる発言を受けた鏡夜は、気が動転しすぎて頭が回らなくなり始めていた。その間にも鏡夜ににじり寄って来た少女は、鏡夜に手を掛けようとした。そこでやっと理性が働いた鏡夜は、その手をかわして走り出した。行き先など何処でもいい。とにかくあの発情スライム少女から逃げ出せればどうでもよかった。

「・・・はぁ・・はぁ・・やったか・・！？」

暫く走って息も切れた鏡夜は、走って来た道を見て見た。そこにはもう先程の少女の姿は無い。安心した鏡夜だったが、今度は後ろから誰かが近付く音がしたので無意識のうちに怖い表情で振り向いていた。そこには、鏡夜の顔を見て怖がったのか小さな女の子が泣きそうな顔をしてブルブルと震えていた。しかし、この女の子にも違和感だ。見た目的には成長の遅い幼児体型で片が済みそうだが、どう見ても子供にしては小さすぎるような気がした。すると、限界が来たのか女の子は泣きながら走って逃げて行った。少し可哀そうな事をしたかなと思った鏡夜は、足元に転がっている石などを蹴って平たい場所を作ってそこに腰を下ろした。周りの景色は、先程の旅館からは想像もできないほどの大草原だった。その風を浴びながら寛ぐことにした鏡夜は、そのまま少しの間を同じ恰好で過ごした。

ｓｔａｇｅ１　モンスターな少女達

空に広がる蒼い空。それは、この少年が少し前にいた場所では見えないほどに澄み切った青色をしていた。

「これから・・・どうするかなぁ・・・」

ここが自分がいた場所でないと言う事をすんなりと認めた鏡夜は、早速次はどうするかを考えた。常識が通用しない物を認めてしまうのも仕方なかった。鏡夜がこの世界へ落ちて来た時、最初は自分の世界だと思っていた。少なくとも宙を浮いていた間はそう考えていた。しかし、運よく鏡夜を受け止めてくれたのは人の姿をして入るが明らかに半透明の少女だった。しかもその少女は、鏡夜を見るなり「Ｈな事をしたい」と言いだしたのだ。疑問と恐怖に押しつぶされた鏡夜はその少女から逃亡。暫く走って此処で座って落ち着いたといった状況だった。

「・・・・・うわっ！」

寝転がって考え事を始めてからはや数十分。此処が何処なのかも分からない状況下では、簡単に考えれば救助が来るまで動かずに待つか、自分から動いて場所の把握を目指すのが妥当だった。しかし、そのどちらも希望は見えなかった。前者は、ここが地図に載っていそうもないので即座に諦めた。後者は、また先程の様な人ならざる者に出くわすのも嫌だったので無理だった。残った選択肢は、この見晴らしのそこそこ良い低い丘でジッとしている事になってしまった。暫く目を瞑って風を感じていたが段々と嫌な足音が聞こえて来たので目を覚ました。その足音の正体は意外と目の前にいた。

「こんにちは！人間さん。」

目の前にいたのは、少し前の体が半透明の少女だった。あの時見た

のは目の錯覚ではないと此処で分かった。彼女の体は、光こそ透き通らせないものの、うっすらと向こう側の景色が見えた。それに体の色も肌色では無く水色に近い青色だった。流石に目の部分は白目と黒目の部分があったが、体の大半はどうやら水分のような物の構成で出来ているようだ。その少女は、ニコッと笑うと鏡夜に手を伸ばした。最初は反射的にまたHがしたいと誘われると身構えた鏡夜だが、そんな必要は無かった。彼女は手を伸ばしていたが明らかに掴んでもらうために伸ばしていた。それを掴んだ鏡夜は、そのまま彼女に起こしてもらった。その時の手の冷たさは、鏡夜にとって忘れられない物となった。

「私の名前はライム。よろしくね？人間さん。」
ライムと名乗った少女は、起こした鏡夜の腕に抱きついた。その冷たさと言ったら、まるで水で出来たスーツを着ているようだった。しかし、これでライムがもう変な気を起こしそうにないと分かった鏡夜は、とりあえずは此処に付いての事を調べることにした。

「それじゃ・・・ライムは、此処は何処なのか知ってるか？」
手始めにとりあえず此処についての事からライムに聞いてみた鏡夜だが、ライムからはろくな情報は聞き出せなかった。どうやら彼女は相当の天然さんらしく、此処についての情報などこれっぽっちも持っていなかったのだ。せいぜい自分の家のことぐらいしか知らないらしい。

「そんなにここの事について知りたいの？」
質問された事に対して疑問を抱いたライムは、鏡夜にそれだけを聞いてみた。もちろん鏡夜は首を縦に振って肯定の意を示した。すると、ライムは自分の家に一度帰って地図を持ってくると伝えると、まるでかたつむりが移動するかのようなゆっくりした動きで帰って行った。付いて行った方が早いと判断した鏡夜が付いていこうとし

たが、ライムがそれを拒んだ。理由は「またさっきみたいに暴走しちゃいかねないから」だそうだ。その指示に従ってその場で待つことにした鏡夜は、また風を浴びる時間に逆戻りしていた。

「・・♪ララッラ～♪・・・ハッ！キサマアァァ！」

鏡夜が風を浴びていると、何処からか歌が聞こえて来た。相当に透き通っている良い声質だ。その声に少し惹かれた鏡夜は試しに顔をあげて見た。すると、丘の下でなにやらトカゲの様な尻尾を生やした女性が武器を片手に歌を歌っていた。しかし、その次の瞬間にはその女性と目が合った。すると、急に恥ずかしくなった女性は顔を真っ赤にして武器を担いで鏡夜に迫って来た危険を感じた鏡夜が退こうとしたが、目の前まで来たところで女性は丘の段差に躓いて転んだ。暫くは動かなかった彼女だったが、少ししてから飛び跳ね起きた。そして、彼女は鏡夜の目の前に跪いた。

「クッ・・・キサマは私を倒したのだ・・・好きにしてくれ・・・」

勝手に転んで勝手に屈服した彼女は、鏡夜の前に跪いて命令を待っていた。何かがおかしいが、その理解不能と言いたげな顔を見た彼女は、説明と同時に何故か自己紹介までしてくれた。

「私の名前はシグレ。リザードという種族の戦士だ。リザード族というのは義理固い種族でな、自分が勝てばその相手を屈服させて自分の好きな事をさせる。だが、それは勝敗が逆でも同じなのだ。自分が負ければ相手の言いなりになる。そういう種族なのだ。私たちは。さぁ！キサマ・・いや、貴君の勝ちだ。好きに命令してくれ。死ねと言うなら喜んで此処で命を断とう。奴隷になれと言うなら喜んで貴君の奴隷となる。さぁ！命令をしてくれ。」

シグレの熱弁に押されて聞き入っていた鏡夜だが、言葉を出せないでいた。シグレのあまりにも熱い熱弁の数々。その邪魔な程の清々しさ。そしてそれだけの発言が許される勇気。それらに押された鏡

夜は完全に勢いで負けていた。暫く考えて鏡夜が出した結論は「此処について教えてください。」それだけだった。その言葉を聞いたシグレは驚いていたが、キョトンとしながらもきちんとこの辺りの事については教えてくれた。

「・・・と、まぁこの辺りはそんな感じだ。しかし、本当にこれだけなのか？私が聞く限り、人間は支配欲の塊だと聞いていたが・・君の様な人間も居るのだな。しかし、これでは私の方の気が済まない。こうなったら・・」

あらかた説明の終わった所で、シグレは本当にこれで良いのかを鏡夜に問いただした。そもそもシグレが転んで負けた時に悔しがっていたのも、これからは自分が鏡夜に何かしらの事をされると早とちりしていたからなのである。それがこの辺りの事を教えて欲しいと言うすっぽ抜けた命令だったので疑問を抱いてしまった。そして鏡夜の存在に感動を覚えたシグレだったが、なんとも予想外だったので自分の気持ちの収まりが付かなかった。それが暴走してしまったシグレは、顔を真っ赤にしながら鏡夜の目の前で防具の留め具を外し始めた。暫くその事に気が付かなかった鏡夜は、シグレが防具を脱いでラフな白いTシャツ一枚になった所でやっとその危険性に気が付いた。彼女が自分をリザード種と言っていたが、それも納得できた。彼女の顔は、普通の人と何ら変わりが無いように見えたが良く見ると耳の部分が尖っていたり、皮膚の所々が鱗のような並びをしていた。外見からわかっていたが腰の辺りからトカゲの様な尻尾が生えていて、そこだけは頑丈そうな鱗質で覆われていた。鎧から飛び出していた辺りも考えると、これを武器にして戦うことも可能だろう。そんな事を考えている鏡夜だったが、直ぐにそんな考えなど吹き飛んだ。鎧を脱いだシグレは、続けてTシャツも脱ぎ始めたのだ。肌蹴た個所から皮膚が覗いていることから容易に次は裸だと判断できた鏡夜は、慌ててそれを止めさせようとした。

「・・・仕方ない。主の命とあらば抑えよう。」
服を脱ぎかけていたシグレは、途中で止めてもう一度服を着直した。その時に鏡夜の事を主と呼んでいる事に鏡夜が気付くまで十数秒の時間のズレがあった。シグレ曰く「私を打ち負かした相手だ。それなりに強いのだから私も供とさせてもらうぞ？」だそうだ。こんなときだけ自分が弱い者だと思い込んでいる。たとえ彼女がいきなり襲ってきても、鏡夜は見事にやり過ごしてくれるだろうとシグレは思っていたのだろう。実際はシグレが向かって来た時には思いっきりビビっていたと言うのに。そんな事を話しあっていると、ゆっくりした速さでライムが戻って来た。その手には、そこそこの大きさの手提げ袋が提げられている。それを見たシグレが警戒していたが、直ぐに鏡夜がその警戒を制してシグレを止めた。そのまま進んでいればどこぞの国民的ゲームのザコキャラ並みの早さでライムがシグレに狩られてしまう。やっとたどり着いたライムは、シグレの警戒ぶりに驚きもしたが、それも鏡夜と話している所を見たからなのか警戒を解いてくれていた。

「・・それで、これが地図で、これが食糧で・・・ええっと・・」
手提げから次々と中身の物を取り出したライムは、まだ手提げの中身を覗いている。外には相当な量の物が出ているのにだ。その間に地図を広げた鏡夜だが、その内容に驚いた。その中身はとても地図とは思えないほど簡略化されており、子供でも余裕で書けそうなほどだった。するとシグレが横入りして来た。その地図を見たシグレが最初に目が行ったのは現在地。そこに目印を付けたシグレは、なにやら色々な場所に街の名前や有名な建造物などを鏡夜に説明しながら印を付けて言った。話の内容の半分は分からなかった鏡夜だが、話のニュアンス的に全てを掴んだ気になっていた。

「・・よし、主。これでだいたいのマークは完了です。」
ライムが手提げから色々な物を出し続ける最中にも地図の至る所に

印をつけていったシグレはとうとう地図の持ち主であるライムが手提げの中身を全て出す前に全部のマークを付け終わってしまった。そこでやっと最後の品である筆箱を取り出したライムが疲れた顔をして鏡夜に凭れかかった。どうやら相当な量を持って来ていたようだ。手提げの大きさと荷物の量が釣り合っていなかった。

「ライム？・・・寝てるよ・・起こさないでいよう。」
ライムが凭れかかって来てから気が付いた鏡夜がライムを揺するが、起きない所で寝たんだと思った鏡夜はシグレに人差し指を出して静かにするように指示した。それを了承したのかシグレは用意良くシートと水筒を置いてくれた。そこにライムを寝かせてシグレに呼ばれ、シグレに受けた説明によると「スライム種は、体の大半が水分で出来ているのです。だから、小まめな水分補給は大切ですよ。覚えておいてください。逆に我々リザード種は水分が無くても5日程度なら死にはしない。こちらもお忘れなきよう。」だそうだ。

「それじゃ、俺たちもここで休憩を。」
シートの上に座った鏡夜は、寝転がって空を見上げた。すると、その隣にシグレが笑顔で寝そべった。その時の空は二人を祝うかのように太陽が照らしていた。

stage2　小さな発情妖精

鏡夜が、ライムとシグレの二人と仲良くなって暫く。眠っていたライムがやっと目を覚ました。どうやら楽しい夢を見られたようで、表情がそれを物語っていた。

「・むにゃにゃ・・・人間さん・・・寝てる・・」

ライムがシートの上から目を覚ますと、隣では鏡夜とシグレが二人で向かい合って眠っていた。その表情は二人とも笑っていて気持ちよく夢を見ているようだった。だが、ライムが目を覚ましたのを感じ取ったシグレが目をゆっくりと開いた。どうやら彼女は低血圧のようで、目が覚めても暫くは呆けていた。しかしだんだんとはっきりしてくると、鏡夜を起こしにかかった。その寝顔を見ている方が幸せなのだが、シグレは自分とライムだけだと物足りないらしく鏡夜を起こそうとしていた。直ぐにそれは叶って鏡夜は目を覚ました。

「ううっ・・・二人とも、オハヨ・・・ライム、少し縮んだ？」

小さく伸びをした鏡夜は、二人におはようの挨拶をした。そこでライムの体に異変が起こっているように見えた鏡夜は少しライムに聞いてみた。すると、ライム曰く「私たちスライム種は・・・えぇっと・・」と思いだそうとしていたのを呆れたシグレが「スライム種は、その身体ゆえに水分が蒸発するんです。そして、水分を摂取しておかなければ太陽の下ならば一日で完全に蒸発。消滅してしまいます。」と説明してくれたそれに思い出したようにライムが声をあげた。

「ん？そういえば、水筒を置いていた様な・・・あぁっ！」

シートの上に、シグレが眠る前に置いておいた筈の水筒の存在を思い出したシグレは、その水筒が見つからずに辺りをキョロキョロし

ていた。暫く探し回っていたが、茂みの向こうに光る物が見えた。不審に思ったシグレがその茂みをそっと覗いてみると、そこには小さな、人の頭の二乗程度の大きさしかない小さな女の子がシグレが用意した物と同じ水筒計3本の内、一つは空にして二本目をがっつりと飲んでいるところだった。後ろからリザード族自慢の瞬発力で捕まえたシグレは、その少女を鏡夜達に突き出した。

「うぅっ・・・私は・・・わた・・しは・・」
シグレに片手で抓まれて涙目になっていた少女は、泣きそうになっていた。少し悪い事をしたかなと思った鏡夜だが、そんな事をしている間にもライムの体からは少量の水蒸気が発生して体が縮んで来ていた。慌てて水筒の無事だった一本を掛けると、とても気持ちよさそうにそれを浴びたライムは体の形が戻って行った。流石に完全に戻った訳ではないが、それなりに大きさ的に戻ったライムの表情はとても嬉しそうだった。その間もずっと泣くのを我慢していた少女は、水筒の中身が使われてしまってがっかりして落ち込んで項垂れてしまった。

「主。こいつはピクシー種と言ういわば妖精だ。こいつらは嘘は言わないが悪戯が好きなんだ。それから、我々と同じく発情期があるのだがこのサイクルがとても・・」
シグレが、捕まえた少女の種族に付いて説明していると、いきなり少女がシグレの手を振り払って鏡夜へ襲いかかろうとした。それをなんとかかわした鏡夜だが、小回りの利く少女の方が一歩上手だったようで、背中に捕まられた。

「もう限界だよぅ・・おにいちゃん！私とHしようよぉ！」
顔を赤くさせて息も荒くなっていた少女は、鏡夜に行為を迫ると服の中へ潜り込んだ。しかし、妖精と言っても手のひらサイズではないのですっぽりと入っても少女の顔が見えてしまっていた。その様

子を見ていたシグレは、ため息をつきながら「ピクシー種はその身体の小ささ故に我慢の利かない体になっていて、特に発情衝動は留め具が無くてだいたい一週間に一度の周期で激しく性交を求めるようになります。それを断ったらずっと付き纏われますよ？」
少女に体を求められながらも抵抗をしていた鏡夜。しかし、最後の重要な部分を聞く前に鏡夜は勢いよくピクシー少女を体から突き離した。それを見たシグレは「あ～あ・・」と呆れて物も言えなくなってしまった。ライムはまだ水を浴びた快感に浸っている。

「もうっ！お兄ちゃん！私にはちゃんとピリカっていう立派な名前があるの！ねぇ？だから良いでしょ？」
意味不明な理屈で再度性交を求めて来たピリカは、そのままた鏡夜に抱き付こうとした。そのしつこさに折れた鏡夜は、そのままピリカが抱きつくのを許した。しかし、それがいけなかった。それで調子に乗ったピリカは、全速力で鏡夜のズボンを降ろしに掛かった。しかし、ピリカが幾ら引っ張ってもズボンは降りない。鏡夜の現在のズボンはジーパンだ。それもちゃんと腰の部分をベルトで留めてある。昔見た腰パンなるものとは違っている。なので、多少の事ではずれ落ちないタイプの履き方をしていた。

「あれ？あれれ？どうなってんの？これ・・・」
何度も何度もジーパンを引っ張っていたピリカだが、一向にそれは破ける気配を見せなかった。引っ張られている鏡夜だからこそ分かる。ピリカには腕力と呼べるだけの力が付いていなかった。まるで赤ん坊が髪の毛を引っ張るような力だ。殆んど皆無と言っても良い。すると、観念したのかピリカはジーパンを引っ張るのを止めた。

「よぅし！こうなったら、お兄ちゃんとH出来るまで一緒に居てやるぅ！見てろよズボン！私はきっと君に勝って見せる！」
そんなこんなで強制的にピリカが鏡夜の仲間になってしまった。ど

うやら一度決めた事は曲げることは無いようで、ピリカに止めるように言っても聞き入れてくれなかった。そして鏡夜の肩に座ったピリカは、そのまま鏡夜の肩の上で眠ってしまった。

「説明します・・ピクシー種は小さい者ですから、その分睡眠時間も長いのです。まぁ、小動物の様な感じですよ。」
だんだんと説明役で定着しそうになっているシグレは、疲れつつ説明してくれた。最後の説明は少し酷い気がしたが、前の説明の通りに発情期までの準備期間が短いと言うのはすっかり当てはまっていた。たとえば例に兎を挙げて見よう。兎は発情期で言えば典型的な例だ。兎は、生まれて三ヶ月もすればもう生殖機能が発達しだして子供の作れる体になっているらしい。しかも兎には発情期の止まりが無いらしく、一年中発情しているらしい。

「では、私たちはこれからどこへ向かおうか・・・」
腰に下げていた地図を広げたシグレは、それを地面に置いて自分も座って考えた。一緒に考えた鏡夜は、面白そうな場所を地図の中に見つけた。そこは一般的に『アラクネの谷』と呼べれている洞窟だった。その場所を差されたシグレは、とても分かりやすく嫌な顔をした。シグレは嫌な顔をしながらも渋々了承したが、どうも恐怖しているようだった。それは、内気な少女がガキ大将に注意をする時の様なものだろう。状況的に。しかし、理由を見つけることも出来た。その谷を抜けると暫くして大きな街があった。そこを目的地に変更すると、シグレは少し安心したどころではなく飛んで喜んだ。どうやらシグレの説明曰く、その街は女性にとっては憧れの街で色々なデザインの服や装飾品が街の主軸になって来た中心で、それに加えて女性へのサービスも充実しているらしい。その事は説明しているシグレの表情の明るさからもなんとなくは想像できた。その間鏡夜の後ろでなにやら作っていたライムが、完成した品を鏡夜の腰に巻きつけてくれた。

「これは・・・バッグ？あれ？一つだけ大きい口がある。これは・・・」
鏡夜が、付けてもらったバッグを確認して見た。どうやら地図を持って来た時の余分なもので作ってくれたらしい。まぁ、そのお陰でライムがもって来た手提げはいろんな所が切り取られていて使い物にならなくなっていた。どうやら殆んどは手提げを基に作ってあるらしい。しかし、その中に一つだけ大きなポケットを見つけた鏡夜はその中に手を突っ込んでみた。中は快適な程の温かさを帯びていた。

「そこはピリカちゃん専用の一人部屋です。」
ライムが言っていた通り、ピリカを中に入れると丁度良くピリカ一人がすっぽりと入ってしまった。そして鏡夜達は気持ちを新たに、地図に書かれている街を目指して歩き出した。

ｓｔａｇｅ４　アラクネの谷

新たにピリカと言うピクシーを仲間に加えた鏡夜達一行は、はるか西にある大きな街を目指して歩いていた。途中、何度か可笑しな種族に出くわしたが、彼女たちも鏡夜達と同じく旅をしている一行らしく戦闘の意志がまるっきり無かった。しかも構成メンバーは女性ばかり。少々心配になったが、その中にベヒモスと言う強力な種族がいる事をシグレに教えてもらった鏡夜はそのお陰で向こうのパーティーへの心配が無くなった。笑顔で別れた鏡夜達はそのまま真っ直ぐアラクネの谷を目指した。

「えぇっと・・・そろそろ夕焼けかな？」

鏡夜が空を眺めながらその様子を見ていたが、段々と空の色が赤くなり始めたので夕焼けが近いと予測できた。その頃にもなると、眠っていたピリカも目を覚ましていた。最初はまたもや「Ｈしよう！」などと言っていたが、シグレに教えてもらったピクシーの弱点「太股の内側をくすぐる」をしてやると、急に暴れて苦しみ悶えて笑って太股で鏡夜の指を締め付けた。最初はそれが赤ん坊が親や見に来た人の指を掴む感覚と同じだと思っていた鏡夜だが、そんな感傷に浸っている内にピリカの動きが急に止まって鏡夜の手に倒れ込んだ。その顔は、気持ちよかったのか満足そうに笑っていた。あまり慣れていないのか鏡夜の手から離れようとしなかった。と言うより、暫くは五体満足した感じで体を動かそうとしなかった。聞こえてくるのは荒い呼吸と何度も鏡夜を「おにいちゃん」と呼ぶ声ばかりだった。

「ピリカちゃん・・・激しいね・・」

鏡夜の手の上で満足そうに笑って動かないピリカを心配したライムだが、ピリカを撫でてやろうとすると危険を感じたかのようにピリ

カが鏡夜の肩の裏へ回った。こういう時にピクシー種は便利な物だ。ピクシーは背中に羽を持っているのでそれを使って飛ぶこともできる。しかも誰かに襲われてもその小さな体と素早さを生かして逃げることもできる。そう言うのをピリカは使ったのだ。

「あらら？私って、嫌われてる？」

少し落ち込み気味になってしまったライムだが、ピリカの視線はライムには向けられていなかった。視線はライムのその向こう。やっと見えて来たアラクネの谷へと向けられていた。暫く歩いて言ってやっとアラクネの谷に辿りついた鏡夜達は、一度大きく深呼吸して気持ちを落ち着かせてから中へと入って行った。中に入るときに、ピリカは暗い所が嫌いらしく鏡夜のバッグに入ってしまった。

「なんか・・・ジメジメしてるのは私は嬉しいんだけど・・・」

空気が湿っているせいなのか、ライムはかなりテンションの上限値が上がっているように見えた。しかし、それを上回って恐怖とスリルがライムの背筋を逆撫でていた。しばらく歩いて行くと、段々と蜘蛛の糸が壁にへばり付いているのが見えた。もうそろそろ危険だと思い始めた鏡夜だが、その心配は的中してしまった。足に何かが絡みついたかと思うと、間髪入れずにそれが引っ張られて壁をすり抜けて鏡夜の体が壁へと消えた。その際、鏡夜は頭を岩にぶつけて意識がぶっ飛んだ。

「・・・あれ？にんげんさ・・鏡夜さんは？」

背後の異変に、鏡夜が消えて少し進んでから気が付いたライムはシグレにそれを伝えようとした。しかし、ライムのドジが此処で発揮される。どうやらシグレとは分かれ道で分岐してしまったらしく、シグレの姿が何処にも見えなかった。

「・・・・主、そういえば・・主？」

しばらく何も言わずに歩いていたシグレだが、何か伝えたい事を思い出して後ろを振り返った。しかし、そこには鏡夜はおろかライムやピリカも居なかった。俗に言う迷子だ。完全に迷子だ。それで周りに誰も居なくなったと分かったシグレは、急にこの場所が怖くなってしまって顔から血の気が引いた。それからは自分の体を震わせながら先に進もうとした。しかし、洞窟の向こうから水の滴る音が聞こえるたびに恐怖で体を固めてしまっていた。

「・・・・」

一方その頃、鏡夜は気絶した状態で何処かの広い場所に糸でグルグル巻きにされて吊るされていた。通りの向こうから数人の喋り声が聞こえようとも鏡夜が起きることは無かった。暫くすると、上半身が人間の女性で下半身は大蜘蛛の体をしたモンスター「アラクネ」の団体が此処へ到着した。

「・・でさぁ、クゥの奴さぁ、何て言ったと思うぅ？」

どうやら声の数からして三人から四人程度だった。その誰もが、鏡夜が吊るされているのを見て目の色を変えて鏡夜に迫った。しかし、気絶している鏡夜は逃げることも気付くこともできなかった。バッグの中のピリカも恐怖から飛びだせない。幸いと言えば、アラクネ達の大きさが人と大差ない事が救いだっただろう。

「この人間・・・美味しそうね！」

「食べちゃおうか！」

「襲うの間違いじゃないの？」

「どっち道『食べる』からいいのっ！」

アラクネ達がコロコロと笑いながら雑談に走っていたが、一番先頭に居たアラクネが鏡夜を包んでいる糸に手を掛けた。そしてその鋭い爪で糸を切って鏡夜を自分の上に落とすと、鏡夜の体中を弄り始めた。

「やっぱり、こういうクールそうな男の子にはこの私、アーリャが一番でしょ。」
鏡夜の体を弄り回した後に、今度は撫でまわし始めたアーリャと名乗る女性。見た目的にどうやら鏡夜とは3～4歳ほど離れているように見えた。まぁ、人の寿命がこの手のモンスターに通用するかどうかは不振だが、とにかく鏡夜は色々とピンチになっていた。特に貞操の危機。

「あ～あ、見てらんないわ！アーリャ、どうしていつも遊んでるのよ。いつも情を移してる訳じゃないでしょ？」
アーリャが、鏡夜の体を撫でまわして遊んでいた。すると、しびれを切らしたのか一人のアラクネがアーリャから鏡夜を取ろうと鏡夜の腕を掴んだ。どうやらその先の引っ張り合いが予想されていたが、もう一人の方のアラクネが鏡夜の腕を掴む強さが強すぎたらしく。爪が鏡夜の腕に刺さった。その痛さに「痛ぇっ！」と大声をあげて目を覚ました鏡夜は、目の前の惨状に驚きを隠せなかった。目の前には女性が3人いた。その誰もが派手なボンテージの様な物を身につけている。マゾヒストなら泣いて喜んでいただろう。しかし、鏡夜にそう言った変態病は無い。しかも、その人たちもただの人ではない。上半身はナイスバディな御姉さんに見えるだろうが、下半身は大蜘蛛の物そのものだった。

「離しなさいよ！この子は私がたっぷりと遊びながら食べるのぉ！」
「そっちこそ離しなさいよ！その子は私が一気に満足させてから食べるのぉ！」
鏡夜はイマイチ言葉の理解に苦しんだが、ここがモンスターが徘徊している世界だと言う概念を頭にぶち込んだ瞬間、その謎は解かれた。しかし、鏡夜は為す術もなく二人のアラクネに引っ張られていた。痛みに耐えかねた鏡夜が痛みを訴えると、鏡夜が起きている事

に今更気が付いたアラクネ達は一斉に鏡夜を狙って三つ巴の戦いに成って行った。その隙に逃げようとして腕を振り払った鏡夜だが、直ぐに足に糸を絡められて壁に磔にされてしまった。

「このぉ！邪魔しないでぇ！」

「あの子は私が愉しませてあげるのぉ！」

「・・・こうなったら皆でやれば？」『それだ！』

アラクネ達が鏡夜を巡って泥沼の戦いを繰り広げていた。しかし、途中で止めてしまった一人のアラクネが妙案を提案する。その案は一番アラクネ達の心に火を付けたらしく、他の二人が声を揃えて鏡夜に向いた。そしてみんなして鏡夜に手を伸ばした。ライムがあの時手を伸ばしてくれたのとは全然違う感じだ。

「さぁ、まずは服から脱がせましょ？ボタンをはずして、丁寧にね？」

「ホント、ネネはなんでも丁寧にしようとするわね・・まぁ良いけど。」

「まったく、今の言葉、クゥにも聞かせてやりたいわ。ねぇ、アルネ？」

所謂３Ｐを提案したネネと呼ばれた女性が、鏡夜が両手を縛られて動けなくなった所で鏡夜の服に手を掛けた。そしてそのまま鏡夜の服を脱がしに掛かったネネは、他のアルネとアーリャと駄弁りながら鏡夜の服のボタンを外していっていた。その手際は器用で、爪が長いのにもかかわらず服に一度も引っ掛けていなかった。あっという間に鏡夜の服のボタンを外し終えたネネは、さっそく鏡夜の服を脱がせた。その際、鏡夜が物凄く嫌がっていたのを耳触りに感じたアーリャが、鏡夜の口を飛ばした糸で塞いだ。

「それにしても・・・きれいな体してるわね。ますます美味しそうッ♪」

糸を飛ばして鏡夜の口を塞いだアーリャが、鏡夜の裸姿をみて舌舐めずりしていた。その表情は正しくモンスターだ。鏡夜の体に手を這わせているネネも、なんだか息が荒くなっているようにも鏡夜には聞こえた。アルネはと言うと、鏡夜の体を舐めまわすように視線を巡らせてニヤリと笑っていた。暫くはそんな状態が続いていたが、下拵(したごしら)えは此処までだと言うように鏡夜の体を這いずりまわっていたネネの手が段々と下の方へ向かって行った。このままでは本当にヤバい。いろんな意味でヤバい。

「さて、そろそろ本番と行きましょうね？僕？」
鏡夜のズボンに手を掛けて、焦らすかのようにズボンをずらそうとしていたネネ。その視線の先では、鏡夜が必死に首を横に振っている。しかし、アーリャに口を縛られている為に言葉を発する事は出来ないでいた。そのままピンチから絶望へと変わるかと思っていた鏡夜だが、そのピリオドは唐突に撃たれた。

「・・・主！あ・・アラクネ・・主に・・・主に手を・・手を出すなぁ！」
アーリャ達も通って来た、そこそこ広い一本道。その奥から鏡夜にとっては聞き覚えのある声が、アラクネ達にとっては食事の邪魔者となる存在の声が聞こえた。その正体は直ぐに現れた。それは、洞窟の暗さと孤独から恐怖が表に出て、体を震わせているシグレだった。そのシグレだが、鏡夜を見つけるや否や体の緊張感が嘘だったかのように解かれてそれは全て勇気に変わった。背中の剣を抜いてアラクネ達に立ち向かったシグレは、自分よりも力が強く、更には状況的にも有利なアラクネ3人に対して善戦していた。

「くっ・・・これは・・ハッ！くあぁっ・・」
武器を持っていない戦術的有利を最大限に発揮してアラクネ達を徐々に押して来ていたシグレだったが、それも長くは続かなかった。

アラクネ達の攻撃は、素早さこそ無いものの威力はリザード種のそれを凌駕していた。暫く善戦していたシグレも、段々と消耗していき隙を見つけられて体中に蜘蛛の糸を絡められて身動きが取れなくなってしまった。そこからはまた鏡夜で遊ぶアラクネ達の図が展開される・・筈だった。しかし、ネネが鏡夜の張り付けられている筈の壁を見ると、そこには鏡夜の姿は無かった。

「お前達アラクネの弱い所は・・此処か！」

捨て身と賭けを両方全掛けしてネネの背後に回り込んだ鏡夜は、ネネの下半身の糸の出ているところ目掛けて木の棒を突き刺した。これが失敗すればもう助かる事は無いだろう。それどころか運が悪ければシグレもアラクネ達の餌食になってしまう。しかし、この賭けは鏡夜が勝ちを納めていた。

「！あぁあぁぁっ！」

鏡夜の放った木の棒を糸の飛び出し口ジャストに受けてそのままズブリと刺さったネネは、体中を駆け抜けた快感に耐えきれずに気持ちよさそうな顔をして地面に倒れ伏して体を震わせていた。その事に気が付いたアーリャとアルネは、逃げ出した鏡夜を捕まえようと糸を飛ばした。しかし、ここでも奇跡は起こる。

「あぁ！人間さ・・鏡夜さぁん！」

鏡夜とアラクネ達の対角線上に現れたのは、鏡夜ともシグレとも逸れてしまって少し気持ちが落ち込んでいたライムだった。しかし、鏡夜を見つけて気分が跳ね上がったライムは鏡夜に近づこうとトンネルを抜けて広場に出た。ライムの背後にはネネ達の放った蜘蛛の糸が飛んで来ていた。鏡夜が急いで注意しようとしたが、既に遅かった。蜘蛛の糸はライムに絡みついた。しかし、ネネ達の表情が嫌そうな顔になったのと同時に結果は見えたのだった。蜘蛛の糸は確かにライムに絡まっている。しかし、それは直ぐにズレ落ちている。

スライム種の水分ばかりで構成された体だからこそ為し得る業である。しかもこの蜘蛛の糸、使い捨てではないらしくネネ達は糸を手繰り寄せると、ヌメりを手で払って退散して行った。ライムは事実上の鏡夜の（貞操の）命の恩人になってくれた。そしていつの間にか糸を解かれて動けるようになっていたシグレが鏡夜の無事を心配してすっ飛んで来た。その眼には涙が少し浮かんでいる。それほどまでに心配してくれたのだ。

「主！何処も怪我は？なぁ、主！」

鏡夜が何度も返事を返しても尚何度も鏡夜に無事を確かめようと声を掛けていたシグレだが、数にして約９回目でやっと鏡夜の声が彼女に届いた。そして安心したのかシグレはそのまま地面にヘタリと座り込むと、目を閉じて心の奥から安心しきっていた。暫くして動けるようになったシグレを連れて、鏡夜達はさっさとアラクネの谷を抜けてしまった。その間、アーリャ達に会う事は無かったが暫くは彼女たちもライムのヌメりを思い出す度にトラウマに支配される事だろう。そして、洞窟を出た鏡夜達は眩しさに目を細めながらも真っ直ぐ街へと向かって歩を進めて行った。

ｓｔａｇｅ５　シグレとの約束

鏡夜達がアラクネの谷から脱出して、夕焼けの日差し眩しさを感じていた。その時、鏡夜はある異変に気が付いた。そう言えばライムの体が少々縮んでいる。先程のアラクネ達からの攻撃を防御した時に持って行かれていたらしい。今となっては少女程度の大きさしかない。（身長にして約１２０？）

「うぅ・・・鏡夜さんがこんなにも大きく・・ひゃっ！」

少し悔しそうに鏡夜との身長差を比べて余計に悔しくなったライムは、口をとがらせて拗ねてしまっていた。これでは完全に鏡夜が悪い事になっている。それを良しとしなかった鏡夜は、ライムがそっぽを向いている隙を突いてライムを捕まえて自分の肩に乗せて肩車をしてあげた。すると、先程まで拗ねていたのが嘘だったかのように軽い笑顔で笑っているライムがそこには居た。先程までの拗ねているライムは何処かへ退散したらしい。その笑い声で起きたのか、ピリカが蓋の開いていたバッグからゆらりと眠たそうに出て来た。そして、そのままライムの肩に乗るとジッとして動かなくなった。

「それにしても、ライムの格好って凄いよな。」

今まで特に気にしていなかったが、肩車をしてあげて彼女をより近くに感じているこの状態になってやっと鏡夜はライムの体に疑問を抱いた。ライムの体には、服と言う概念が存在しておらず、代わりにライムの体と同じ色のゼリー状の物質がぴったりのＴシャツの形を構成していた。下半身は、特に何かを構成している様子もない。つまりは裸も同然なのだ。しかし、ライム自身は何も恥ずかしそうにはしていなかった。所謂「パンツじゃないから恥ずかしくないんだもん！」と言う訳だろう。ピチピチのスーツで下半身を包んでいると思えば大丈夫だ。それにしてもライムの表情には驚きだ。なん

とも満足そうな、はたまた気持ち良さそうな表情をしている。シグレの説明によれば、ライム達スライム種には口と言う概念が無く、言うなれば体全体が口になっているらしい。一応、視認できる形では顔の部分に存在するが彼女たちは特に何か食べ物を食べる訳でもないので、その口もさして必要性は無い物だそうだ。そんな説明だったからなのか、ライムは鏡夜の上で少し虚ろな声で怒っていた。その様子に危機感を覚えた鏡夜は、直ぐにシグレに水を貰ってそれをライムに渡した。それを飲んだライムは、飲んだ先から体が元に戻って行った。暫くすれば体も元に戻ったが、鏡夜が肩車を止めようとするとライムは鏡夜の顔にしがみついて嫌がったのでライムを降ろす事もなく先を進んだ。

「主。もうこの先に小さな町がある。今日はそこで宿を取ろう。」空の色も深い朱から深い藍色に変わりゆき、もうそろそろ夜に突入しそうな頃にシグレはこの辺りの情報について町がある事を思い出して鏡夜に、そこで一泊する事を勧めた。それに応じた鏡夜は少しばかり足の速さを速めた。もうすぐこの世界に来てから御飯にありつける。最初にライムが持って来ていた食料品は、ライムのドジで置いて来てしまっている。未開封のままだ。全てを食べそびれていた。そんな空腹状態だった鏡夜は、気持ちの高ぶりが主な原因で足の速さがさらに早まった。そのおかげであっという間に宿まで辿りついてしまった。

「さてっと！チェックインも済ませたし、ちょっと休ませて・・」シグレの交渉術もあって比較的安価で泊めてもらえる事になった鏡夜達は、それぞれにベットへと寝転がっておもいきり背伸びをした。そして、疲れ果てていた鏡夜はそのまま眠りに付きたかった。そのまま目を閉じればそこは夢の世界。の筈だった。

「おにいちゃん！やっぱり私とH・・ひゃん！」

鏡夜が無防備なのを狙ってか、それともただ単に我慢したくなかったからなのか、ピリカが鏡夜の目の前でそれだけ言うと鏡夜の服の中に入ろうとした。そこで鏡夜は、薄目のままでピリカの太股へと手をやりくすぐり始めた。鏡夜が触れた時点で太股を思い切り締めて鏡夜の指を苦しめたピリカだが、やはり弱点は太股で有るのでそのまま鏡夜の手に倒れ込んで恍惚の表情を浮かべながら気持ち良さそうにしていた。その間、ライムは辺りの床を転がりまわっていた。これではまるで子供だった。しかし、そのお陰で床がピカピカになっていたのは面白かった。

「うぅっ・・・わかったよぉ・・・ライムおねぇちゃん！一緒にお風呂入ろうよ。」

鏡夜が色々な工夫を試してピリカで遊んでいたが、観念したピリカはライムをお風呂に誘うと、それを了承したライムと共に露天風呂のある場所へと向かって行った。これで残っているのは鏡夜とシグレの二人きりだ。

「・・・えっと・・・・・主・・いや、鏡夜！頼みがある。私と・・きゃっ！」

部屋の端のベットで、疲れを癒すために寛いでいた鏡夜。その隣のベットでは、シグレがベットに座って俯いていた。しかし、何かを決断したのか顔を上げたシグレは鏡夜のベットへ向かった。そこで寝ころんでいた鏡夜は一瞬だけシグレの近づく気配に気付けなかった。そして、シグレが鏡夜を「主」ではなく名前で呼んだ時、鏡夜に手を伸ばそうとした。しかし、運悪く鏡夜が起き上がって来てシグレと激突。そのまま双方共にベットからずり落ちる形で落ちた。その時の二人の体勢『シグレ：鏡夜の下に潜り込む形で倒れていて、両手は鏡夜の腕が塞いでいる状態。鏡夜：シグレの上に四つん這いになった状態で落ち着いていて、反射で床に手を付こうとして何故かシグレの腕を掴んでいた。』

「・・・鏡夜・・私は・・・・」
なんとも誤解されそうな体勢のまま暫くそのままの状態が続いた鏡夜とシグレだが、段々と心にスキマが出来たのかシグレの顔が赤くなって来ていた。鏡夜を呼ぶその声も何処か女性っぽさを感じさせる艶やかな声色に変わっていて、シグレの瞳もトロンとしている。そこでやっと状況を理解した鏡夜が、慌てて退こうとするが一瞬でシグレの強靭な尻尾で固定されてしまった。その時の鏡夜には、その固定された時の感覚でアラクネ達の事を思い出して少し表情が歪んだ。このままでは暴走したシグレに何をされるかは分かり切っている。危険を感じた鏡夜だが、まともに言葉を発することもできなかった。シグレの尻尾の締め付けは相当なもので、鏡夜の心肺機能を低下させる事はいとも簡単な程だ。その上、状況的に鏡夜も男性だと言う事で心臓が危険を感じて鼓動が高まって来た。

「・・鏡夜・・・さぁ、私と・・クッ！」
鏡夜を襲う事になってしまったシグレ（発情期間中）と、そのスイッチを無意識に入れてしまった（きっかけを作ったのはシグレ）鏡夜は、他には誰も居ない部屋で今お互いの貞操に危機が迫っていた。しかし、あまりにもシグレの心の高ぶりが強すぎたせいなのか、シグレの力は段々と落ちていっていた。そこに勝機を見た鏡夜は隙を見計らって、シグレが目を閉じて口づけを求めて来た瞬間を狙ってシグレの尻尾の束縛から脱出。驚きに目を見開いているシグレには申し訳ないが、鏡夜が一瞬でシグレの背後に回り込んでシグレの両腕を掴んで拘束した後、無意識なのだろうが伸びて来たシグレの尻尾を踏みつけて動きを止めた。その間わずか４秒。

「やめるんだ！シグレ。これじゃ、君もあのアラクネ達と同じだぞ！それでいいのか？」
シグレの動きを完全に止めた鏡夜は、シグレの耳元で彼女を怒鳴っ

た。その注意を聞き入っていたシグレだが、正気を取り戻してからは状況を素早く判断して言葉も出なくなって床に座り込んでしまった。

「・・うぅっ・・・・うわぁぁぁぁん・・・」

鏡夜が、シグレにもう暴走の気配が見当たらないと判断して彼女の手を放した。そして床にペタンと座り込んでしまったシグレは、自分の悔しさや自責の念から哀しみが込み上げて泣き出してしまった。そして反射的に鏡夜に抱きついた。それを鏡夜はかわす事も出来たが、今回は彼女の涙に免じてその抱擁を良しとした。そして鏡夜の胸で暫く子供のように泣き続けたシグレは、泣きやむまでにかなりの時間を要した後に涙が止まった。そして鏡夜から離れたシグレは、涙で跡が残っている顔のままで鏡夜を見つめる形になった。

「・・シグレ、俺と約束して欲しい。簡単な事だ。お前は、別に俺の事を「主」だとか「ご主人」とかって呼ばず、普通に「鏡夜」で呼んでくれていい。それに、お前が今みたいに歯止めが利かなくなったら俺が止めてやる。だからその代わり、俺の傍に居て欲しいんだ。」

鏡夜が、泣きやんで鏡夜を見つめていたシグレを優しく抱きしめた。そして、鏡夜とシグレは約束を交わした。内容はどうあれ、鏡夜はシグレにプロポーズにも束縛にも聞こえる約束をした。鏡夜側が不利だが、そんな事はどうでもよかった。問題は、これをシグレが了解してくれるかだった。しかし、そんな事を考えるまでもなくシグレは鏡夜の抱擁に温められて、心が休まったのか最後の一絞りの涙を流しながら「はい・・」とだけ返事をした。鏡夜には、その答えだけで十分だった。暫く抱き合っていた二人だが、部屋の扉が開かれる音が聞こえた。

「いやぁ、スッキリしたよぉ・・・おにいちゃん？シグレ？二人と

も何してんの？」
扉を開けた正体は、風呂に行っていたピリカとライムだった。二人の服装は（ピリカ：ピクシー用の小さめの浴衣姿。ライム：スライム種の特性をカバーして作られている普通の浴衣姿。本当はスライムの水分を布が吸収しない様に加工してあるだけ。）だった。そして、鏡夜とシグレの二人は背中合わせに正座して座っていた。傍から見れば変な光景だ。このフォーメーションが何か意味を成すとは思えない。後は、この状態に至る少し前に何かがあったとピリカは素早く理解した。しかし、それも好奇心で終わるものだった。睡魔には勝てない。

「さてと、私とライムはお風呂に入ったし・・・後は寝ちゃおうか。おにいちゃんとシグレは入って来たよね？それじゃ、皆で一列になって寝よぉ！」
シグレと鏡夜の状態に大した疑問も持たなかったピリカは、半ば強引に全員で川の字で寝ることを提案して来た。ライムはその間に体に水分を流し込んでいた。風呂場でも蒸発などで体は小さくなるものらしく、この部屋に入って来た時のライムの大きさは、此処に来た時と変わっていなかった。しかし、水分を補給すると見る見る内に元の大きさへと戻って行った。寧ろ水分の取り過ぎにも見える。体の局部局部が大きくなってきている気さえした。ライムの胸が、服を押して盛り上がってきたり、お尻が膨らんでいるようにも見える。まぁ、大差ないと言えば大差ないのだが。

「それで・・・なんで俺が真ん中で・・みんな早いな・・俺も寝よッ・・・」
何故が鏡夜は、右にはライムとピリカが、左にはシグレが寝ているその真ん中になる並びになっていた。しかし、それが一番安心できるらしくライム達はものの数秒と掛からない内に眠りについてしまった。だから、鏡夜がそのすぐ後にツッコミを入れても誰も反応し

なかった。みんなが寝たのを確認した鏡夜は、そのまま自分も眠りに着いた。そして、部屋には静寂が訪れる。

ｓｔａｇｅ６　無口な彼女はスケルトン

鏡夜がライム達と一緒に川の字になって眠って次の日の朝が来た。一番最初に目を覚ましたのは鏡夜。その次に、悪い夢でも見ていたのか慌てて飛び起きたのがシグレだった。そして、ライムとピリカはそれから暫くしてから目を覚ました。早々にチェックアウトした鏡夜達は、街の途中の駄菓子屋で幾つかのお菓子を買ってから町を出た。

「それにしても、これ美味いよ！」
鏡夜が食べているのは、何やらゼリーの様なコンニャクの様な食べ物だった。歯触りは非常によく食べやすい。味も結構美味しい。さらにはコンパクトサイズなので持ち運びにも便利。水に浸すと膨張して大きくなるなどと、面白いお菓子だった。

「私のおススメだったのだが、気に入ってもらえて嬉しいよ・・・鏡夜・・」
鏡夜の後ろで同じものを食べていたシグレが、鏡夜に満面の笑みを見せた。そして、鏡夜を以前のように「主」では無く「鏡夜」と呼んで少し顔を赤らめていた。その様子を見てシグレの素振りを可愛いと思った鏡夜は、悪戯っぽく笑ってやるとシグレの頭を掻きむしるように撫でていた。その後ろでは、その光景を羨ましそうに見つめるライムとピリカがいた。

「それにしても・・・あとどれくらいなんでしょうかねぇ。」
暫く歩いて町が見えなくなった頃に、不意にライムが空を見上げた。空は雲が所々に出ている。それがたまに影となって鏡夜達を太陽の日差しから少しばかり遮ってくれていた。そんな中、シグレは不意に地面に手を突いた。

「みんな！こんな所に面白いやつがいたぞ？」
シグレは、地面からその面白い奴を引っこ抜いた。その姿は何処となく人の形のようにもなんとなく見えなくはないような植物の根だった。その根はシグレの言った通り面白かった。シグレがその根の部分を千切ってやると、千切った先から新しい根が生えて来た。しかも、前の物よりも幾分か成長している。物理法則を無視しているかのような再生スピードだが、やはりここは異世界。物理法則も曖昧なのかもしれないと鏡夜は感じた。

「さて、調子も取り戻したし・・・元気に・・・ん？」
鏡夜が、全員の腕を自分の元へと並べさせて号令をした。そして心身ともに好調な状態になった鏡夜達は再び目的地を目指して進もうと進行方向を向いた。するとその方向には一人の少女がこちらへと近づいてくるのが見えた。その手には古びた盾と錆びついた剣を持っていた。足取りはとても遅く、ライムでも追い越せてしまうほどなのだろう。しかし、格好がどうも危険じみていた。重要な部分はきちんと隠れてはいるが、殆んど裸に近い状態だったのだ。マントの様な物を着ているのでどうにか隠れている状態だ。そして、その少女はこちらが少女を認識したと分かると徐々に足のペースを速めてこちらに迫って来た。あっという間に鏡夜達の傍まで来た少女は、無言のまま切りかかろうとした。もちろんそれをシグレが許す筈が無い。背中の剣を手にとってその攻撃を防いだ。

「なんなんだ！いきなり！私たちはまだ・・『グゥゥゥ・・』・・へ？」
鏡夜への奇襲に失敗し。今度はターゲットをシグレに変えた少女が、二の太刀を繰り出そうと踏み込んだ。来ると分かったシグレはそれに対応するために足を踏ん張りながら少女へ呼びかけた。その時、少女のお腹の音が響いた。鏡夜やシグレ、ライムやピリカでは無い。

方向的にシグレと対峙している少女のお腹から聞こえて来たのだ。試しに鏡夜がポケットの中に入っていた余りの分の駄菓子を一つ、少女に与えて見た。すると少女は構えを解いて鏡夜に近づくとその駄菓子を無言で貰って食べ始めた。その間に鏡夜はその少女を見て見た。良く見ればまだ幼く見える。成長期を通って思春期に来た位の女の子の体格からして年齢は１３才くらいだろうと鏡夜は推測した。

「・・・・美味しかった・・」

鏡夜から貰った駄菓子を食べ終えた少女は、率直な感想を鏡夜にボソリと伝えるとゆっくりと鏡夜の腕に抱きついた。どうやら鏡夜はこの少女に気に入られたらしい。鏡夜が離れるように伝えると、特に嫌そうな顔もすることなく離れてくれた。そして鏡夜が進もうとすると少女も付いて来ていた。

「しょうがないか。君も連れて行くよ。君の名前は？」

鏡夜が、いつまでも別れてくれそうにない少女に折れて彼女を連れていくことを決めた。そして鏡夜は少女の名前を聞いていた。これからは一緒に行くのだから名前くらい知っておかないと可笑しいだろう。そして、数拍の間を置いてから少女は自分の名前を「・・・・リナ・・」とだけ小声で伝えた。どうにも彼女は内気と言うか人見知りのように思えた鏡夜だが、シグレの説明で「彼女はスケルトンと言われる種類で、基は人間だったものが別の魂を死んでから入れられて再び動きだすようになったのがスケルトンなんだ。あっ！予備知識だけどスケルトンは発生条件に幾つも条件があるから出てくるのは稀だよ！」と教えてくれた。以前の説明とでは堅苦しさが消えていて聞きやすかった鏡夜は、簡単にリナの事を理解した。今更だが思う事がある。このパーティは文字通りの異色になりかけている。鏡夜はまともな人間だが、ライムはスライム種故に体が薄い半透明の水色。ピリカは妖精で人の肌とは同じ色だが、羽が黄色っぽ

い色をしている。シグレは基になる部分は人と大差ないのだが、リザード種特有の尻尾や顔の頬の一部に耳の部分などトカゲの名残とも思えるような個所には緑っぽい皮膚が存在している。そしてリナはと言うと、体が全体的に青ざめて血の引いた肌の様な色をしている。しかも彼女の下半身は腐敗していた為なのか骨がうっすらと見える。

「ささ・・気を取り直して！レッツ・ゴー！」

少し空気を乱してしまったかのように気を落としてしまった鏡夜だが、その隣でシグレが鏡夜の代わりに号令をかけてくれて少し心が和んだ。そして鏡夜達は改めて目的地へ向かって歩き出した。

ｓｔａｇｅ７　私の鏡夜なんだから！ｖｏｌ．１

鏡夜が新たにスケルトン種であるリナを仲間に加えて、改めて目的地の街へと歩き始めた頃の事。鏡夜達は小さな川を渡る橋にさしかかっていた。しかし、その川縁には面白い植物や動物が沢山居るとシグレが教えてくれたので少し休憩することにした。

「……マスター……」

リナが、鏡夜の傍で特に何かをするでもなくジッとしていると、リナが唐突に鏡夜を呼んだ。すぐ傍にいたのできちんと聞こえた鏡夜は少し驚いた。リナの手には、いつ捕まえたのか小型犬程の大きさもある巨大なバッタが捕まえられてジタバタと暴れていた。それを素直に褒めてあげた鏡夜は、リナの頭を撫でて褒めてあげた。すると、リナの表情が多少明るくなった気がした鏡夜だが、直ぐにいつもの無表情に戻ってしまった。そしてリナは、鏡夜の真似をするように手に持っているバッタを撫でてあげた。しかしそのバッタは非道なバッタなのか、すぐに嫌がって逃げてしまった。それを、リナは追いかけようとはしなかった。

「……」

ただただバッタが飛んで行った方向を見つめていた鏡夜だが、向こうの方からピリカが呼んでいるのが聞こえて立ちあがった後に、まだそこら辺をキョロキョロしていたリナと少し別れてピリカの所へ向かった。直ぐにピリカの居る場所へと辿りつけた鏡夜は、ピリカの周りの異変に気が付いた。トラップではないにしても、これは何かがある。そう思わせるようなトラップが色々な個所に設置されている。どうやらそのトラップに四方八方囲まれていたらしく、ピリカは涙目で動けないでいた。すぐさまその場を動いてピリカを助けようと動いた鏡夜だが、早速トラップの一つが発動した。これはど

うやら竹の槍が飛んでくる仕掛けの様だ。ただし、飛んできたのは爪楊枝の様なものだった。それを楽々と手で受け止めた鏡夜は、大きさからこのトラップを仕掛けたのがピクシー種であるとすぐに理解した。しかし、この雑さには違和感を覚えてしまった。

「お兄ちゃん！助けに来てくれた！」

嬉しそうに目を輝かせたピリカは、嬉しさのあまり鏡夜に向かって飛んできてしまった。そこでやはりトラップは発生してしまった。それは、ピリカが鏡夜に向かおうと飛んだ時に足にワイヤーを引っ掛けると言うものだった。すると、何処からともなく煙玉が投げ入れられた。幾つかが固まって飛んできたのだから、これも設置されたトラップの一つなのだろうと思った鏡夜は一つ一つを飛んできた方向とは違う方向へと弾き飛ばした。すると案外簡単な場所に隠れていたピクシー達が煙に耐えかねて出て来た。

「ケホッ！コホッ！・・はっ！もう、こうなりゃ強姦よぉ！みんなぁ！戦闘準備ィ！」

煙の中から出て来たのは、ピリカとそこまで年の変わらないピクシー種の少女だった。そして、彼女が怒りを露わにすると、仲間のピクシー種を呼んで来た。なにやら暴言の様な物も聞こえたが、鏡夜はさして気にする事も無かった。ピリカと同じように擽って解決させようと身構えた鏡夜。しかし、意外な事が起こった。鏡夜の背後からいきなり現れたピクシー達が鏡夜の足をすくった。そのお陰で予期せぬ体勢から転んだ鏡夜は、状況を理解するのに少しばかりの時間を要してしまった。その間に鏡夜を縄で縛ってしまったピクシー達は（見た目だけだとガリバー旅行記の小人の島である。ちょっと大きめだけど。）鏡夜の服の中に入ってきたり、鏡夜のズボンを脱がそうと努力したりしていた。その内に、ピクシー達がベルトの存在に気が付いてしまった。そこからは素早くベルトを引き抜くピクシーの姿が見る事が出来た。しかも、その中にピリカの姿まで見

えたのには少し呆れてしまった。そうこうしている内に鏡夜はズボンを脱がされてパンツ一枚になってしまった。歓喜の声を上げたピクシー達は、そのまま鏡夜のパンツを脱がそうとした。しかし、その途中で矢の様なものが飛んできてピクシーを綺麗にすり抜けて鏡夜を縛っていたワイヤーを切り裂いた。それに気が付いていないピクシー達は、ダイブしようと身構えたりしていた。そこで鏡夜が腕を伸ばし、手近に居た一人のピクシーの太股をくすぐった。

「はうぅ・・はあぁっ！・・・も、もっとぉ・・」

鏡夜がくすぐったピクシーは、突然の快感からなのか背筋を伸ばして恍惚の表情を浮かべながら一瞬で鏡夜の手の上へ崩れ落ちた。息遣いも荒いピクシーは、快感に体を震わせながらも鏡夜の手にしがみついて迫って来た。それを見たピクシー達は、まとめて（約６名）鏡夜の手へ飛びこんで口々に先程と同じ事を求めて来た。

「お兄ちゃん！私も！私もぉ！」

ピクシーのまるで無理やりに色仕掛けでいこうとしている中途半端な艶やかさの声の中にピリカの声を認めた鏡夜は、ため息を吐きながら最初に飛び込んできたピクシーの太股に指を走らせた。すると一瞬で恍惚の表情を浮かべたピクシーは、そのまま鏡夜の手にしがみついた。どうやら往生際が悪いらしく、ピクシーは鏡夜の手を抱きしめて離そうとしなかった。しかし、鏡夜が指をピクリと動かすとピクシーは体を強張らせて嬌声を挙げて鏡夜の手を締め付けた。そして、体をブルブルと震わせながら力尽きたピクシーは気持ち良さそうに下へと降りた。その調子でピクシー達の相手をした鏡夜は、あっという間に全てのピクシーを満足させてしまった。そして満足気な表情のまま眠ってしまったピリカをバッグの部屋に入れた鏡夜はその場を去った。

「あっ！鏡夜！良い所に。ちょっとこっちに来てくれないか？」

ピクシー達の躾から解放され、ピリカをバッグに入れてそこら辺をウロウロしていた鏡夜だが急に近くからシグレに呼ばれた。なんだろうと思って近づいた鏡夜は驚いた。そこは川辺だったのだが、そこに居た少女に鏡夜は驚いたのだ。見た目は人間の少女と大差ない。しかし、彼女の背中には大きなランドセルの様な物が背負われていた。そして頭には純白に輝きそうなほど白いピカピカしたお皿が乗っていた。すると少女は、シグレと話していたのを止めて鏡夜を品定めするかのように見つめた。

「・・・うん。シグレちゃんの言う事に間違いは無いね。私はカナ。しがない妖怪河童さ。よろしくね。」

鏡夜を見つめていたカナは、鏡夜がシグレの言う通りの人物だった事に喜んでニコリと笑うと、鏡夜の手を握って自己紹介をしてくれた。どうやら鏡夜の一瞬の予想は当たっていた。見た目的には人となんら変わりないカナだが、やはり河童だった。そしてカナは、鏡夜の手を離すと何故かキュウリを手渡してくれた。どうやらこれはカナの好物らしく、シグレが認める鏡夜にこそ食べて欲しいのだそうだ。それを聞いた鏡夜は、それをお礼を言って食べて見た。すると食感や味などは普通のキュウリとなんら変わりない物だと分かった。

「うん。美味しいよ。」

鏡夜がキュウリを食べて率直な感想をカナに伝えると、カナはとても嬉しそうに笑うと「良かった！」と言って鏡夜達に手を振って水の中へと帰って行った。どうやら手持ちのキュウリが底を尽きたのと約束があったのだろうとシグレから聞いた鏡夜は、直ぐそこで水浴びをしていたライムも連れて橋へと向かった。そこでは既にリナが待機していて、鏡夜の姿を見つけると遊んでいた小動物に別れを告げて逃がしてやると鏡夜の元へとゆっくりと歩いて行った。そして、合流した鏡夜達は河を渡している橋を渡って行った。そのすぐ

傍では、川から出て来たカナが、鏡夜をトロンとした目で見つめているの彼女以外は知る由も無かった。

stage8　到着

あれから橋を渡った鏡夜達は、特に危ない事柄に巻き込まれる事も無く山の3合目あたりで野宿をする準備に入っていた。因みに、ライムは暗い夜道を危険が無いか捜索に、ピリカはそれに同行。シグレは晩御飯を釣りに沢へ出向きリナも山菜摘みに出かけた。よって、今の鏡夜は一人きりである。

「ふうぅ・・・・よしっ！後少しで薪が切れそうだし、そこら辺から・・・・」

事前に熾しておいた炎の火種を確認し、そろそろ底を尽きると思い始めていた鏡夜は適当な近場から木の枝でも拾ってこようと立ち上がった。しかし、目線の先に何かが居るのを見つけた鏡夜はその場で動きを止めてしまった。もしもあれが相当大きな獣で、そんな奴に暴れられたらひとたまりも無い。そう思って鏡夜は動きを止めたのだ。

「ふぅん、やっぱり男だったかぁ。それじゃ、私たちもそろそろ発情期だしぃ？誘拐・・・しちゃおっか♪」

「えっ？ちょっ・・・」

鏡夜の心配事は外れた。茂みから出て来たのは、猛牛に似た形の捩れた剛角に派手で扇情的なパンク系にも見える短い服装。そして何より、その背中に持つ彼女ほどもある大きな銃剣。間違いない。彼女は［ベヒモス］と呼ばれる強大な力を持った種族である。しかし、どうにも彼女の言っている事に関して良い予感が鏡夜はしなかった。その直後、背中の銃剣を引き抜いて鏡夜に斬り付けて来た女性は、鏡夜がそれをかわしたと知ると、とても悔しそうな表情で怒っていた。その表情が何故か可愛い。まるで強大な力が有るとは思えないほど子供の様な姿に見えてしまう。

「かわすな、かわすな！かわすなぁ！！」
「かわさなかったら死んでるぞ？！殺す気か！」
「いいから黙って誘拐されてよぉ！それで、皆と《ニャンニャン》してよぉ！」
彼女の言っている事は可笑しい。あの剣の刀身は地面にめり込んでいるのではない。地面を斬っていたのだ。そんな物が体に触れれば、どうなるかなんて一目瞭然だ。それなのに彼女は非殺傷である「誘拐」と言う選択を取っている。見た目からすれば殺しに来ているとしか思えない。

「なんだよニャンニャンって！俺だったら何の役にも立たないと思うぞ？その役目！」
「いいの！アンタは皆の補給源になってくれればそれでいいの！」
「・・・・輸血か何かなのか？！」
「違うもんっ！アンタの男の部分を・・・その・・・えっと・・・えと・・・／／／」
何度か同じように剣戟をかわしていった鏡夜だが、今彼女に対して持っている疑問を全てぶつけた。その内容の意味も分からない鏡夜にとって、彼女の言っている事は支離滅裂過ぎた。しかし、鏡夜が間違った答えを導き出してしまうとその剣戟を一層強めた女性は、怒りも乗せて斬ろうと構えた。しかし、説明の途中で顔を真っ赤に紅潮させてしまった。しかも剣戟も止んでいる。

「俺の男の部分？なんだそりゃ。それに、アンタみたいな可愛い子が、こんな物騒な物を振り回してちゃ危ないだろ？」
「うぅ・・・私を馬鹿に・・・するなぁ・・・」
「あぁ、分かったよ。ところで、君の名前は？」
「えっ？殺しにきた相手の名前を聞くの？アンタ面白いじゃん。私の名前はムート。見ての通りのベヒモスだよ。」

「それで・・・・俺達のキャンプまで何しに来たんだ？まさか俺達の後を付けていた訳でも無いし・・・」
鏡夜は、先程まで闘っていた筈の少女を自分たちのキャンプに招いた。そして鏡夜は思った。先程は暗がりで見えにくかったが、ムートは扇情的な服装を着こんでいると言うだけであって見た目はリナとそこまで大差のない少女だと分かった。彼女が言うには、ベヒモスと言うのは処女を捨ててしまえば定期的に男性とHな事をしなければ禁断症状を起こし、最終的には同族の肉を食い荒らし、近場の街を荒し尽して自分も命を絶つと言う。なので、彼女が彼氏候補を探しに来たのも自分や家族の為なのだろうと鏡夜は考えた。

「・・・さて、そろそろ仲間が戻ってくる。この辺りでお引き取り願いた・・ムグッ！」
少しの間ムートと話していた鏡夜だったが、月の角度と星の位置を見てムートに注意を促した。皆が帰ってきて、自分たちの仲間が女性を一人連れて二人きりでいたと分かれば、皆どんな行動に出るか怖くて分からない。故に彼女を帰らせる事を勧めた鏡夜だったが、言葉が綴られ終わる直前に鏡夜の口は動けなくなってしまった。

「それじゃ、鏡夜？また会おうね♪」
「あぁ・・・・またな・・・・・なんで俺の名前を・・？」
短く軽いキスをしたムートは、直ぐにその場を離れて紅い顔のまま現れた茂みへと鏡夜に手を振りながら向かって姿を消した。それから数拍置いてムートが自分の名前を知っていた事に疑問を持った鏡夜。鏡夜は先程の話の時に、考えて見れば自分の名前を教えていない。なのに何故、彼女は鏡夜の名前を知っていたのだろうか。しかし、その考えはシグレが魚を持って戻ってきた事によってかき消された。その後に戻ってきたライムとピリカも含めて、野宿での晩御飯が始まった。その時に一番がっついていたのはリナだった。

「ふぅ♪それじゃ、おやすみぃ♪」
「おやすみなさぁい♪」
「お兄ちゃんと一緒だぁい♪」
「おやすみ。皆」
「・・・おやすみ・・・・」
晩御飯も食べ終わり、暫く雑談などで盛り上がった皆は夜も更けて今は全員で眠ろうとしている所だ。それぞれに大きな葉っぱを水で洗って焚火で乾燥。それを布団として利用していた。因みにリナだけは何も要らないらしく鏡夜の傍で三角座りをして眠ろうとしていた。ピリカはバッグの部屋の蓋を開けて鏡夜のすぐ近くで就寝。ライムも鏡夜に寄り添うほど近くで笑顔を作りながら就寝。シグレは、鞘に収めた剣を抱いて警戒を緩めつつ就寝した。因みに、焚火を起こしている為なのか獣は寄って来ない。そして、あっという間に朝が訪れた。

「到着したな。目的地に。」
「ええ。此処が女性たちの憧れの街、その名も［アレンジタウン］。此処に来たからには、色々な買い物をして行く事を強く奨めています♪」
「あれ？シグレの口調が戻って・・「五月蠅い！」キャンッ！」
山を下った鏡夜達は、あっという間に目的地へ到着した。アレンジタウンは、流石に女性たちの憧れの場所で有るだけの事はあるようで、大都市と呼べるほどに大きな街だった。その入り口に立った鏡夜達は、シグレの説明の下でこの町に付いての大まかな説明を聞いた。しかしその途中で、鏡夜の肩に留まって暇そうに足をブラブラさせていたピリカが、ついつい呟いてしまったのをシグレは見逃さずピリカに襲いかかろうとした。しかしピリカは、可愛らしい声を上げながら鏡夜の背中に回り込んで貼りついた。直ぐに鏡夜も止めに入ったので事なきを得たが、これが少し状況が違っていればどうなっていたのか分からない。

「フフ～ン♪フフ・・・・げっ！この前の・・」
鏡夜達が街の中に入って暫く行くと、とあるファッションブランドの専門店の前で鼻歌を歌いながら服を選んでいる女性が居た。彼女の下半身は大きな蜘蛛を形取っていて、歩くのも早そうな形をしている。そう、彼女の種族はアラクネである。そして、彼女の名前はアーリャ。ついこの間に鏡夜達を襲うが失敗して退散して行ったアラクネの一人である。あの後彼女は、友人と別れてこの町へ買い物に行く事にしていたのだ。そして、ここで彼らと出くわしたと言う訳だ。

「あぁあぁっ！この前のアラクネ団！「誰が団よ！誰が！」」
「キサマ！また鏡夜を狙って来たのか？！」
「いけません！鏡夜参はお守りします！」
「お兄ちゃんは私が・・ちょっ！お兄ちゃんやめてよ！」
それぞれにアラクネに対して警戒していた鏡夜達一行だったが、一人だけ身構えていない者が居た。リナだ。リナは身構えるどころか武器に手を掛けようともせずの鏡夜の数歩後ろに居る。いつものように無口だ。それを見て、一番状況が分かっているのがリナだと分かったシグレ達は構えを解いた。

「・・・・ワーウルフ警備隊・・・」
リナが指差す方向には、まだ遠い位置だが警備服っぽい物を来たワーウルフと呼ばれる半人半狼の種族が数人の束になって街を見回っていた。彼女たちは忠義に厚く、主と認めた者に対してはどんな命令でも忠実にこなすとシグレから以前に聞いていた鏡夜は、ワーウルフ達の想像を膨らませて居たりした。因みにアーリャは、ライムのスライム状のアレを付けたくなかったのか既に退散している。

「・・・・・疑問点を上げて良いか？」

「どうしたんだ？別にかまわないぞ？」
「さっきから人間の男性はちょくちょく見かけているんだが、魔物の男性が居ないんだが・・・」
「・・・鏡夜、もしかしてアッチ系なの「馬鹿！違うっ！」あぁ。私たち魔物には男性と言う性別は存在しない。これは繁殖の制限化と呼ばれる現象で、人間には男女共に存在しているんだが、魔物には女性しか存在しないんだ。だから私たちには、発情期と言うものが存在する。そうでもしてし・・・子孫を残さないと生き残れないからな。」
街をまた歩き出して疑問を感じた鏡夜が、ふとシグレに聞いてみた。その問いに、シグレは少しでも分かりやすいようにと説明をしてくれた。それによれば、人間以外の種族には男性と呼べる性別が存在しないらしい。しかし、鏡夜にはそこまで重要視するような問題でも無かった為にそこまで長い時間は取らなかった。そして、鏡夜達は仲良く街の中を練り歩いて行く。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0167o/

少女達の発情期〜怪物異世界録〜

2011年2月15日22時40分発行